第6回

発掘！きわめびと

三つの合唱団の歌唱指導、指揮に携わる声楽家。市民ミュージカル「こころのミュージカル」では指導、作曲を担当。

やまぐち　まりこ
山口 万里子さん

1961年東京世田谷生まれ。立教女学院中時代、聖歌隊で歌うことの楽しさに目覚める。桐朋学園大学音楽学部声楽科在学中に山口忠雄さん（現・ヤマグチパイピング社長）と知り合い、結婚。3人の子どもを育てながら、近所の子どもたちにピアノを教える。31歳のとき、「コーラス・フィオレンテ」の指導に携わり、2011年から、市民ミュージカル「こころのミュージカル」の歌唱指導、作曲を担当。最近義母が施設に入居し、ご主人と2人家族。

「指揮者ってド真ん中にいるから、一番わかるポジションなの。しかも、自分の言葉一つでコーラスが変わってくる。だからめちゃめちゃ楽しいし、こんな楽しい仕事はありません」

今、万里子さんが関わっている合唱団は、「コーラス・フィオレンテ」（佐久穂町）、「JA佐久浅間歌声ひろば」、「ポピー童謡の会」の三つ。「コーラス・フィオレンテ」は歌唱指導を始めて二十五年になる。また、市民ミュージカル「こころのミュージカル」の歌唱指導、作曲に携わって七年になる。

在学中に結婚し、旧佐久町大日向に来たのが大学を卒業したばかりの二十二歳のとき。子育てをしながら近所の子どもたちにピアノを教えていたが、子育てがひと段落したころ、「万里子さん、出てこられない？」と声がかかった。合唱指導の依頼だった。大学で声楽を学んだ万里子さんにとって合唱は専門分野。断る理由などなかった。ちょうどご主人が起業したときでもあった。

指揮の醍醐味は「一番いいところで音楽が聴けること」だという。「指揮者ってド真ん中にいるから、うわっ、よくなった、今のは違う、って一番わかるポジションなの。しかも、自分の言葉一つでコーラスが変わってくる。だからめちゃめちゃ楽しいし、こんな楽しい仕事はない」と顔を輝かす。

†

大学卒業直後に生まれた長女とピアノを持って東京から来きた万里子さん。だが、周囲はみな危ぶんだ。

祖父には、「田舎と東京は五十年の隔たりがある」と言われ、大学時代の親友や友人たちからは「かわいそう」「もったいない」「悲惨ね」と言われた。そして集落の人たちからは「何でアンタここへ来たの？」「田舎に憧れて来たの？」と訝られた。

だが、万里子さん自身は音楽を捨てたわけでもなく、田舎に憧れてきたわけでもなかった。

「だって、私が育った狛江市（東京）は周りじゅう畑だらけだし、多摩川べりだし、十分に田舎でしたから」

万里子さんを駆りたてたもの、それは夫への愛だった。

「だって、自分が好きになった人のところへ嫁げるくらい楽しいことはないですよ」

カルチャーギャップがなかったわけではない。家の中でも靴を履いたままという、アメリカナイズされた一族に育った万里子さんにとって、大日向はやはり草深い田舎だった。

救いになったのは義母の存在。

「幸いなことに群馬生まれの義母が若いときに、奉公でいろんな場所に行って、外の世界を見てきた人だったので、新しく来た私を戸惑いながらも受け入れてくれた。それがとてもありがたかったですね」

†

結婚後、もう一度声楽を勉強し直したいと思った万里子さんは、往年の名ソプラノ歌手で「世界でたった一人習いたい先生だった」東敦子さんのレッスンを受けるため、月に一回東京へ通う。もちろん子育てをしながらだ。そして八年後、「先生からようやくほめられるようになりました」。

大学の願書に書いた言葉を万里子さんは今でも鮮明に覚えている。「たとえ聴衆が一人であっても、生涯演奏家でありたい」――。

コーラスの指導でもつねに言うことは、「お隣の家の方が客席にいたら、その人を喜ばせましょう」。万里子さん自身も「誰を喜ばせたいのかを自問自答する日々」だという。

バイタリティにあふれ、元気いっぱいの万里子さんだが、「一人では生きていかれないタチ」と笑う。

「人から見れば、田舎にいて夢を追っているように見えるかもしれないけれど、夫、そして家族はものすごく大きなファクター。家族も、夫の会社も盛り上げ、音楽も盛り上げたい。私って欲張りなんですよ。そしてなにより、いままで自由にやらせてくれた夫に感謝しています」

「こころのミュージカル」のイベントで指揮をする山口万里子さん。「万里子先生のようになりたいと言われるのが一番うれしい」（佐久平のイオンで）

●取材・文／中村仁（ライター、八千穂高原在住）

発行　佐久穂町役場　長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地　TEL 0267-86-2525
編集　総合政策課　印刷　キクハラインク有限会社